

ステイールパン。パン工匠への道

園部 良

ある出会い

私は小さい頃から音楽が大好きでした。ラジオから流れてくる自分がいいと思つた音楽を、カセットテープに録音しては繰り返し聞いていたものです。

音楽に身を委ねていると、心もワクワクするし、背中はずクゾクして生活に欠かせないものとなつていきました。初めてお小遣いで買ったレコードは小学校五年生のときでした。深夜番組をよく聴いていた兄の影響もあつて、選んだのは中島みゆきさんの「わかれうた」でした。

中学に入るとYMOにどっぷりとはまりました。少ないお小遣いから捻出しては坂本龍一さんの難解なレコードを買つたりもしましたのです。

小学校、中学校、高校と勉強らしき勉強をしたことがありません。家に帰るとラジオやラジオから録音したテープを聴くという生活をしていたように思います。

生来学校というものが嫌いでしたので、危うく高校は留年しそうになりましたが、大学にだけは行つてみたいという願望から高校は何とか卒業し、その当時、好んで現代小説をよく読んでいたこともあつて国文学科に入学しました。

大学というところは、それまでの学校とは違い自由でやりたいことが何でも出来ると思ひ込んで

いましたが、予想とは反して暗い鬱々とした学生生活が待っていました。

当時のバブル経済が生み出す浮かれた世相は肌に合わず、耳に入つて来るもの、眼に映るものが軽薄に感じられ、バラエティ番組を見て談笑する家族の笑い声さえもいとわしく感じる位にストレスが募つていきました。

当然大学でも孤立し、満たされることのない心の欲求は増すばかりでした。そんな状況の中で唯一楽しみであったのは、映画や音楽や書物などの文芸作品群でした。自分でも何かを表現してみたいという欲求がその頃から募つていき、映画を撮つたり音楽を演奏したりしましたが、心を駆り立てる決定的なものに出会えず悶々としていた頃に、ある一つの出会いがありました。

当時私は、実家のある千葉県八千代市八千代台にすんでいました。駅前に、とても小さいけれども非常にレアな作品群を置いているレンタルビデオ店がありました。そこで深夜まで借りるものが見つからず迷っていると、ピンク色のスリムジーンズを履いた怪しげな細身の店員さんは、閉店前なのにシャッターを閉め、「ゆつくり選んで下さい」とコーヒーを煎れてくれました。

後日、その方に誘われてお宅を訪問すると、彼の部屋は書物とレコードに溢れていました。

その日を境に、週に一度くらいのペースで安酒

ハンドパンの音の調べを確認する筆者

を持参してはお宅にお邪魔し、夜中まで森羅万象について語り合ったものでした。ある日、いつものように音楽を聴かせてもらいながら談笑していると、突然思いもかけない音楽が部屋に流れました。その音は旋律というよりも濃密な音の束のよ

